
● 書 評 ●

Enrico Cattaneo S. J.

*II Commento a Isaia di Basilio di Cesarea:
Attribuzione e studio teologico-letterario*

Studia Ephemeridis Augustinianum 139

Roma: Institutum Patristicum Augustinianum, 2014, pp. 602,

ISBN: 978-88-7961-137-4, B/5, €65.00

秋 山 学

本書は、イタリアのイエズス会士、エンリコ・カッタネオ師（1943- ）による最新の大著である。師はナポリの教皇庁立南部イタリア神学大学（聖ルイジ部門）の名誉教授であり、現在はローマの教皇庁立東方研究学院において、引き続き教父神学を講じておられる。私見によれば、師は聖書学から教父学、典礼学、神学のすべてにわたって活躍を続ける、現在最もオールマイティな研究者の一人である。まず師の略歴から紹介したい。

カッタネオ師は1962年、ミラノのイエズス会レオ13世高等学校において卒業資格を取得、次いで1964年から1967年にかけて、同市郊外ガッララテの同会アロイジオ哲学院で哲学を修め、「アリストテレスの『形而上学』ラムダ巻について」という題目で哲学課程を修了しておられる。これに続き1967年から71年にかけてはパドヴァ大学の古典学部で学び、「テルトゥリアヌスにおける神認識と啓示：ニケア公会議以前におけるルカ福音書10, 21-22をめぐりての釈義」という論文で課程修了し、次いで1971年から74年にかけて、上述のナポリ・南伊神学大学にて神学の修了資格を取得しておられる。1974年から76年にかけては、パリのカトリック神学院に学んで聖書神学・組織神学修士号を取得（「H. U. フォン・バルタザールの解釈におけるニュッサのグレゴリオスのアポカタスタシス論」）、1976年から79年にかけては、同神学院・ソルボンヌ大学に学び、第3期博士号を取得された（『ラオディケアのアポリナリスの著作としての、偽クリュソスト

モス作の三つの説教：原作者の推定と神学的研究』；1981年にBeauchesne社より公刊)。以降現在に至るまで、「神学雑誌」(*Rassegna in Teologia*)、および「カトリック文化」(*Civiltà Cattolica*)誌に健筆を揮っておられる。

120点余りに上るカッタネオ師の論文・著作目録は、師の70歳を記念する論文集『福音・伝承・真理』(2013年にAgnès Bastit-Kalinowska, Anna Carfora両氏の共編によりIl Pozzo di Giacobbe社より刊行)の331-341頁に挙がっている。注目されるべき師の事績としては、まずPaoline社より1997年に刊行された、800頁を超える『古代教会の聖務』がある。この書は2017年にCerf社より仏語版が出版され、同年11月20日にはパリで師を交えての書評会が行われた。そのほかEdizioni Liturgiche社より第1版が1978年に、第2版が1983年に出版された650頁を超える大著『西方におけるキリスト教儀礼：史的注解』も名著であり、2016年に第2次の再版が行われている。このほか師は、イエズス会士B.ロナーガン(1904-1984)の著作の伊訳にも携わっておられる。

このようにカッタネオ師は、幼少期よりイエズス会生え抜きの神学者として育まれたスーパー・エリートのお一人であるが、評者は2009年の夏、ポーランドのクラクフで開催された第10回国際オリゲネス学会において初めて師と出会った。大会終了後、空港で少しく言葉を交わしただけなのであるが、その後評者がイタリア語論文のチェックをお願いすれば、必ず速やかに快く応じて下さるおらかな方である。なおクラクフ大会での師の発表は「エルサレムに攻め上る二人の王の同盟(イザヤ7:1-9):オリゲネス的一節」と題され、*Origeniana Decima: Origen as Writer* (Peeters, 2011)の437-444頁に掲載されている。この論考は、本書の第27節に「実質的にそのまま」(303頁)収められており、したがって2009年の時点ですでに、師が本書の執筆に向けて準備を整えておられたことがわかる(ちなみにこの論文は、先に引いた師の著作目録からは漏れている)。

このほか師には、同僚の方々との無数とも言える共著がある。評者の手許にあるものから、師による新しい事績だけを引くことにすると、Carlo Colonna師との共著になる『キリスト教徒の心における詩篇：神を讃美するための新たな方法とともに』(*Sapienza e Vita*, 2015)に載る「『詩篇』の司祭的読み方」が挙げられよう。これは『詩篇』のうち43:4, 16:2, 84:2, 119:97, 70:2, 96:1, 137:4を扱うものである。こうして師は、われわれが教父学の個別的問題に取

り組む際、参照すべき種々の専門的論考、すなわち教義神学、聖書解釈、教会法、典礼、霊性、本文批判、古代史等々、実に多彩な分野の論文を発表しておられる。師の事績は、その柔軟で精緻な思考、および師が与った教育の豊饒さを遺憾なく証しするだけでなく、後進の教父学徒にとって最良の導きの星となっている。

そのような師が10年来の歳月をかけて完成させたのが本書である。本書でその真正性が論じられている(伝)バシレイオス(330-379)作『イザヤ書注解』は、『イザヤ書』第1章～第16章の注解であり、エウセビオス(263-339)からの影響が指摘されてきた。一時代前の教父学概説書では、内容および文体上の不完全性を理由に、この著作における著者バシレイオスの真正性が疑問視されている。しかしJ. Witting(1922)の研究以降、最近ではN. A. Lipatov(1993, 2001)の研究に至るまで、真正説も唱えられてきた。

本書は、あわせて45節より成る本論部分に「総結」を加えた計46節で構成され、全体で計6部の構成となっている。まず第1部「導入的諸問題」(1-6節)は、「教父たちにおける預言者イザヤ」「『イザヤ書注解』をめぐる最古の証言」「写本伝承」「版本と翻訳」「『イザヤ書注解』の真正性をめぐる現代の議論」「第1部小結」の各節を収める。この第1部では、この『注解』の著者問題に関して「支持」(pro)と「反対」(contro)の両面が併在し、いずれも決定的とは言えないという現在の研究状況が明らかにされる。まず「支持」の面としては、手写本伝承、古代著作家たちの証言などが挙げられうるが、一方「反対」の面としては、文体の不統一、繰り返し、バシレイオスのような洗練された教養人には相応しくない論証、といった点が挙げられる。しかしバシレイオスのものでないと仮定すれば、文面からして明らかにバシレイオス的な章節が、なぜこれほど頻繁に現れるのかを説明することは不可能である。第2部「文学的依存関係の検証」(7-9節)は、このpro/contro問題をいったん措いて始められ、「文学上の依存関係：1)「酩酊」「同：2)「断食」「第2部小結」の順に進められる。もし本著作の著者とバシレイオスの間に影響関係があったと仮定すれば、その向きには2通りがあり、2つの可能性がある。だがこの著作自体に内的な一貫性が認められることから、これらはいずれもありえず、結局この著作の著者とバシレイオスとは同一人物であるという結論のみが残る。

このような前提を基に、以下では本論部がテーマ別に進められ、本著作の著者をめぐる真偽問題の検証が行われる。第3部は『イザヤ書注解』における自然

と文化」(10-14節)と題され、「自然現象と天文学」「植物」「動物」「医学と技術」「定義」を収める。第4部は「『イザヤ書注解』における聖書」(15-22節)と題され、「預言と言葉の賜物：『イザヤ書』の序言」「『イザヤ書注解』における聖書釈義の基準と実践」「イスラエルと歴史：聖書の歴史的意味」「ユダヤの律法と霊的意味」「聖書に見られる名の語源」「『注解』で用いられる『イザヤ書』本文、および他の翻訳者たちへの参照」「ヤコブとイスラエル」「モーセとエリヤ」に分かたれる。第5部は「個々の聖書本文に関して」(23-32節)と題され、「わたしは飽いた」(イザヤ1:11;以下、同書の章節番号)「7人の女」と「1人の男」(4:1)「ぶどう畑のたとえ」(5:1-7)「イザヤの召命と派遣」(6:1以下)「エルサレムに攻め上る2人の王の同盟」(7:1-2)「出て行くがよい」(7:3)「見よ、わたしと、主がわたしに委ねた子らは」(8:18)「短くされた言葉」(10:22-23)「悪意ある思いと行為」「オリゲネス的“余談”の例」が載る。そして第6部は「神学的・倫理的諸テーマ」(33-45節)と題され、「美をめぐる観想」「神—キリスト—霊」「幸いなるおとめマリア」「天使と悪霊」「教会」「教会の聖職者たち」「倫理」「飲酒の罪」「主に嘉せられる断食」「神的教育」「昼・夜の象徴」「火」「最後の審判」が収められている。「総結」部において著者は、本著作をバシレイオス作とした場合、『エウノミオス駁論』との密接な関係から、『駁論』を執筆していた364年頃、『注解』はすでに書き終えられていたと想定し、『注解』の成立年代は、バシレイオスの司教叙階(362)より少し後、アンネシへの第3次隠遁の頃と結論づける(514-515頁)。

著者の文献学的ならびに神学的な実証を通じて、この著作がバシレイオス自身の手になるという可能性は一段と説得力を増したと言えよう。本書の白眉は、第4、第5、第6部に見られるような、聖書テキストを本文伝承と教父神学・諸背景に照らしつつ、真偽問題に立ち向かう著者の方法の確かさ・視座の広やかさであろう。現代を代表する教父学者の最新著である本書を、神学諸分野を自由に縦横断する圧倒的な労作として高く評価したい。
